

二度死ぬ

樹下太郎

「平和新書」は、あなたの図書館です。この本をお読みになってのご意見、ご希望などをおよせください。現代の探求、頭脳のレクリエーション、新しい生き方の工夫……。『平和新書』はこうした本をあなたとともに発行してゆきたいと思っています。

「平和新書」編集部

『二度死ぬ』

平和新書

昭和38年11月30日 発行

定価 270 円

著 者 樹 下 太 郎

発行者 兵 頭 武 郎

印刷所 図書印刷株式会社

製本所 辰 文 社

発 行 所 ア サ ヒ 芸 能 出 版 株 式 会 社

東京都港区芝新橋4の34 (TEL 581・6261)

乱丁・落丁はおとりかえます

(検印廃止)

ムード ミステリー

二度死ぬ

樹下太郎



平和新書

目次

女	5
令嬢	24
虎口	50
二度死ぬ	73
日没を待つ	93
蚊帳の中の女	129
影にされた女	156
北豊島郡池袋	190
黒いスカートの女	211

カバー写真／中田俊之

女

1

九月二十三日の早朝、加賀美きぬという六十歳になる老婆の溺死体が埼玉県N川の岸で発見された。

N川はやがて荒川に注ぐのであるが、老婆の住居は合流点から約四、五キロ程さかのぼったN川沿いにあり、死体は合流点近くのカーブの杭にひっかかって浮かんでいたのである。

老婆は無類の酒好きで、飲みはじめると際限がなかった。酔い痴れて川にはまり込んだのだろうということ、けりがついた。

実際はそうではない。

老婆は突き落されたのである。

突き落した本人であるわたくしがそういうのだから、まちがいはない。

その晩、わたくしは生まれてはじめて老婆と会ったのだった。彼女を殺す目的で会いに行った

のだった。

2

悪臭を放つ乞食ばあであった。

話で聴いて想像していた以上の、ものすごいばあであった。

こんなばあなら虫けらを殺すように殺せると思い、わたくしはひどく気が楽になったことを覚えている。

ところでわたくしは二千名の従業員をもつ某建設工業会社の業務部長である。

今年、三十九歳。

異例に近い出世であるが、それはひとえにわたくしのたゆまざる勉強と努力の結果であった。むかし風にいえば、苦学で、国立の一流大学を卒業したのである。

そうしたつらい過去をひとに感じさせないための苦労も、ひと一倍はらっているものであった。要するに、わたくしとしては、自分が乞食ばあとは全然結びつかない存在であるということを書いてきたまでである。

乞食ばあと会うためには、いつもの服装ではまずかった。

父親にさとられぬようにして、大掃除用にとっておいた綿ギャバの茶色のズボンとくたびれた

開襟シャツに着替え、その晩、ひそかに家を出たのであった。

空は曇っていた。

私鉄のS駅を降りると、暗い道を北に向って歩きはじめた。

父親に残されたたったひとりの兄妹である妹——つまり、わたくしには叔母にあたるひとから詳しく聴いて置いた道順通りに、加賀美きぬの住居を訪れたのである。

きぬは村人からは気狂いか白痴のような扱いを受けているということであった。農家の雑用を足して、辛うじて米塩の資を得ているとのことであった。酒を飲ませると陽気に踊りまくるので、それをなぐさみに、村人はときどき彼女に酒を与えろという。村びとたちは、自分たちが愚弄することの出来る老女を、あるいは愛していたのかも知れなかった。弄ぶことの愉しみを、農民たちはあまり知らないのだ。きぬは恰好の玩具だったのではないか。

さういふとき、叔母に教えられた通りの道を五十分程歩いた。

家らしい小屋を見出したとき、わたくしはひどく疲れていた。

と八時四十分であった。

小屋を改造したという——その実、どこも改造したとは思えないような、一坪程のトタン屋根の小屋にひとり住んでいるのだった。

もちろん小屋の中には電灯もひいていない。

わたくしは、そのことを予め叔母から聴いていたので懐中電灯を用意していた。懐中電灯をと

もしてから、小屋の扉をたたいた。

「今晚は、今晚は」

「はいりな。誰でも構わないよ、はいりな」

ばばあの声は意外に穏やかであつた。

扉を手前に引くと、いきなり悪臭が鼻を衝いた。

あかりでひと通り小屋の中をぐるりとてらしてみた。

ばばあは隅で毛布をかぶって寝ていた。

「おまえ、誰だい？」

「他人さ」

と、わたしは答えた。

「他人ぢが、酉を持ってきた」

一瞬かがやいた。

「そうだとも」

わたくしは 手にぶらさげた風呂敷包みのままの一升瓶をばばあの前につき出した。

「早く飲ませ くれ。村のやつら、近頃、人なみに不景氣になりやがって、焼酎いっぱい飲ませや

がらないのさ。さ、早く飲ませとくれ！」

ばばあは一升瓶に縋りつくようにした。

「待て」

わたくしは邪慳にばばあの手を一升瓶からもぎ離した。

「こんなくさい小屋に一分といられるものか。飲みたかったら外へ出てこい」

「いいともさ。その代りたっぷり飲ませてくれるんだよ」

「わかってるとも」

ばばあは立上ると身繕いした。

油をしみこませたような浴衣の前をあわせる。その下に、壁にしみこんだ血の色のような、都腰巻が見えた。

不潔以上である。

ばばあは小屋の外へ出ると、いきなり地べたにべったり坐りこんだ。

「さあ外だよ、飲ませとくれ」

「此処じゃ駄目だ」

わたくしは吐き捨てるように言った。

「此処でもまだ小屋のにおいがする。くさくてかなわない」

「じゃあ川っぺりに行こうか。あすこは風が涼しい」

ばばあの方から、わたくしの思う壺にはまってきた。

「そうしよう」

わたくしはばばあと肩をならべながら、小屋の裏手の細い道を北に歩いていった。

ばばあ的小屋は畑の中に孤立していて、附近一帯に家はなかったから、わたくしたちの姿を見ている人間は多分ひとりもないはずであった。

空は幸いに曇っている。

さとも畑を横切ると川面が見えた。

にぶい鉛色の水。――流れていた。

一メートル半ばかりの狭い道の上に立った。

ゆるい傾斜の下がN川である。

よしのしげみの中にわたくしは降りていった。

ばばあは左の肩を極端にいからせながら蹤いてきた。

「早く飲ませとくれよ」

「いいとも。此処がいいだろう」

わたくしは一刻も早くそのときを迎えたい気持ちになり、返事をすると同時にその場所にあぐらをかいた。

ばばあもそこへ横坐りになった。

栓をあける前に、

「ばあさんはなんて名前なんだい？」

念のために訊いた。

「加賀美きぬっていうんだよ」

「しゃれた名だな」

「むかし、水商売をやってたんだもんな」

しゃれていても、それは本名である。どうしてそれが水商売に結びつくのか、と、わたくしは思わず失笑してしまった。

「なにがおかしいんだい？」

「ばあさんには関係ないよ」

栓をとると、

「瓶ごと好きなだけ飲みな」

「全部いいのかい？」

「いいとも」

「おまえは飲まないのかい？」

「飲まないよ」

「なぜ、よそのばあに酒を飲ませる気になったんだい」

「としよりに親切にしたいくなる性質なのさ。気にしないで飲みな」

ばばあは答えるさきに、一升瓶をラッパ飲みしはじめた。

ごくごくぐりと音をたてて、まるで水を飲むようである。

二合程のむと、瓶を口から離した。

あとはひと口ごとにせおしない吐息をはいて、肉体の衰えがあらわにわかった。

「うまいねえ」

「全部飲んでいいんだよ」

「そうかい、親切だねえ、おまえは。まるで孝行息子みたいだね」

「子供を生んだことあるのかい？」

「ひとりだけ生んだよ。男の子をね。生れてすぐ死んじゃった」

底の方に二合程残すまで飲むと、矢庭にあお向けにぶったおれた。

ほとんど失神に近いのではないか。

わたくしはおもむろに起ちあがると、ばばあを蹴った。四回目、やっと川に蹴落すことに成功した。

一升瓶の方は、一度かるく蹴っただけで、かわいい水音を立ててくれた。

ばばあはわたしの厄病神だった。

ついに死んでくれたのだった。

多分、これからわたくしにも幸運が訪れてくれるだろう。
晴れ晴れとした気持で、わたくしは同じ道を戻りはじめたのである。

3

その晩、家へ戻ったとき十二時近かった。

父親は起きていた。

「何処へ行っていたのだ」

うさん臭そうにわたくしの服装をじろりと見た。

「いいところさ」

「いいところへ行つたにしては粗末な恰好じゃないか」

「いいところへはお忍びでいかなきゃならないからさ」

「尻に泥がついているぞ」

「うるせえな！」

やくざもののようなどすのきいた声で、わたくしは父親をどやしつけた。

国立一流大学を卒業し、一流会社の業務部長までのしあがった三十九歳の男の、知られざる一面といったところである。

女

父親はわたくしのそういう下卑な態度や言葉を却って喜ぶ傾向があった。いくら出世してもやっぱりおれの息子だという親近感をおぼえるからであらうか。

また肉親のさずなを確かめるために、わたくしにわざとそういう荒っぽい言葉を言わせようとはかっているのかも知れない。

父親はへたくそな大工であった。

わたくしはものごころついてから、父親の明るい表情を一度も見ることがなかった。上機嫌なときでさえ、どことなく寂しいかげがつきまっていた。上機嫌になればなる程、そのかげはますます濃さを増してゆくのだった。

座敷へ戻ると、ビールの栓を抜いた。

父親がコップを持つてのっそりはいつてきた。

「おれにもいっぱいくれ。妙にのどが渴いてな」

父親は六十四歳だったが、酒だけは奇妙に強かった。

父親の不運な人生を支えてきたのは酒だけであった。酒のほかに楽しみはなく、しかもそれは楽しみとよぶにはあまりにも陰鬱な飲み方であった。酒がはいるとおしゃべりになるのだったが、ついで陽気な話の出たためしはない。

「あたらしい色女でも出来たのか？」

ねばっこい口調でわたくしに訊く。

「出来ちゃいけないのかい？」

「構わないさ。ただ、おれは女には氣をつけろと言いたいのだ。女で氣立てのいいのは千人に一人いるかないかだからな」

「千人にひとりか。そうだろうな。だからこそお父つつあんは嫁さんを六人も追い出しちまってるんだな。それどころか、おれの嫁さんまで追い出しちまってる」

「悪い女は、男の一生を台なしにしちまうってことを知ってるからさ」

「つまり、おれのためを思ってくれるってわけか」

「そうだとも」

わたくしの妻を、わたくしの家から追い出したのは父親であつた。

父親は、わたくしの妻のやることが片っ端から氣にいらず、ついに悪魔よばわりまでして、彼女を実家へ逃げ帰らせてしまったのである。

別居して三月になるが、まだ籍は抜いていない。会社の連中には、病氣のため実家へ歸してある、と言いつくろっている。

それにしても、父親の女性への憎悪は異常な程はげしかった。

妻を実家へ逃げ帰らせるに至った最後の夜の剣幕など、狂氣じみている。

女
た。